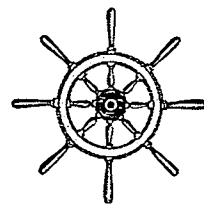


技術と国家、そして宗教

吉田光邦



一、技術と政治のユートピア

ゴスプランということばは、今日の日本ではもはや死語である。だが一九三〇年代の日本では、このことばはある種のがれをもつて語られたのであった。訳して国家計画委員会。それは帝政ロシアが亡び、新しくソビエト連邦が成立したとき、ソビエトは社会主義による工業化のために、国家によって管理され、指導される工業化計画を立てたのである。計画の単位期間は五か年となっていた。その中枢機関がゴスプランである。

レーニンのように、ソビエトは中世的な農業国家から出発した。イギリスの四分の一、ドイツの五分の一、アメリカの十分の一に相当する近代的生産手段によって装備されていた」のが当初のソビエトである。そこで立てられたプログラムは「比較的短い期間に技術的、経済的關係において資本主義諸国に追いつき、それを追いこす」(グリンコ「五か年計画概論」)ことを目標とする。それは明治の日本のもった目標とほぼ同じである。

だがその技術政策の本質的な特徴はと、グリンコは語っている。「電気産業、化学産業及び製鉄産業の巨大な

コンビナートの新設、ならびに他の生産部門一般の広汎な結合化——生産の厳密な専門化、規格化及び厳密な大衆的性質の条件の下において——への断乎たる移行である」と。それは資本主義社会にあつては問題になりえぬ生産コンビナートの計画的、合理的な生産組織の可能性を開くものと考えられたのである。

ここで目標とされたのは、まさしく規格化され、専門化された技術の相互結合によって組織される近代技術の王国である。ゴスプランのたてる国家計画は、そのまま技術の計画であつた。国家組織はイコール、近代技術の要求する結合様式によって成立する。

この目標のもとに進行した五か年計画の成果を、ゴスプランは誇りやかに報告した(ゴスプラン「ソビエト五か年計画の総結果」)。私有工業が勝つか、社会主義工業が勝つか、の問題は一九三〇年に至つて、社会主義工業の決定的勝利として終了した。国民経済は手の労働の支配から、また中世的技術の支配から、近代的生産手段を備えた労働に移つたのであると。

ゴスプランが技術の王国の建設を目標としたとき、そ

のモデルとなるのはアメリカであつた。ロシアのとりべき道は、アメリカが進んだ道であると、すでに一九一六年にボロジンは述べている。ゴスプランの議長は電気技師のクルジヤノフスキーである。レーニンは新しい無限のエネルギーとしての電力に大きな夢をもち、ゴスプランは工業から農業と全産業の電化をめざした。その最初は国営電化十か年計画である。そのなかではつねにアメリカの電力計画が対比されていた。石炭採掘の発展、多くの水系の開発のために、国家電化委員会が組織されたが、その長はやはり先のクルジヤノフスキーであつた。

このクルジヤノフスキーは、アメリカのヘンリー・フォードの思想を高く評価した。現代はエネルギーの時代であり、特に水力エネルギーの時代であるとフォードは語っていた。彼は機械は新時代の救世主とみる。当時是一日九時間労働、日給二・五ドルが相場であつた。しかしフォードは八時間労働、日給五ドルを提唱する。それはまさしく機械の王国に実現される新しい労働社会である。

フォードは積極的にソビエトの工業化を援助した。ゴスプランは製鉄についても、最も進歩した技術としてアメリカの技術を導入することを明記している。その結果、フォードの推挙によってJ・コルダーが招かれ、彼は高炉や製鋼工場の建設の指導にあたった。彼はやがてソビエトの製鋼トラストの主任技師となり、そのもとには九十に及ぶ工場があった。

クルジヤノフスキーは、アメリカとソビエトの社会体制の相違は、かえって技術に対して新しい刺激を与えると考えた。社会主義体制の国では、資本主義体制では扱えない技術も扱うことができる。建設されるべき機械の王国は、すべて人類のためにある。

ソビエトは一九一八年からは、公式にアメリカの技術援助を受け入れることになった。ウェスチングハウス、GE、デュボンなどアメリカの大企業はいっぺいで多くの技術者を送りこみ、アメリカ的生産方式——大量生産——による工場を建設することに協力した。世界最大の発電所として有名となった、ドニエプル河の発電所を建設したのはクーバーである。彼はナイアガラ、ミシシッ

ピー、ナイル、テネシーなどの巨大河川の開発を進めてきた、中心的な人物であった。その彼がソビエトに赴いて、ドニエプル河の開発に従事したのである。

アメリカ的な生産方式、また技術と機械による文明の思想が、このように大挙ソビエトに流れこみ、定着していったのにはそれなりの理由がある。アメリカは工業化に進んでから、まだ半世紀しかたっていない若い国であった。しかも巨大な資源、巨大な国土面積に比して人口はまだ少なく、開拓はなお進行中であつた。そのため機械は、人間の労働に代わる重要な味方とみなされたのである。

一八七九年にフィラデルフィアで、アメリカでは最初の万国博が開かれたが、この時ヨーロッパから視察に赴いた識者たちは、一様にそこにヨーロッパとは異質の機械文明が生まれつつあることに驚きの眼をみはった。料理用レンジや皮むき機あるいは裁縫ミシンによって、日常的な家庭生活すら機械化されていた。召使をもつというヨーロッパの理想生活に対して、ここでは機械が召使の役目をはたそうとしていた。スイスの手仕事の性格

の時計産業をおびやかすものとして、量産方式によって組み立てられる、一ドルウォッチが会場内では売られていた。機械は工場のみで活動するものではなく、ここではすべての世界で機械が動いていた。それは巨大な国土、豊かな資源といったソビエトには、適合させやすい文明だったのである。

しかもヨーロッパの工業技術者たちは、いずれも中世以来の伝統的な手工業者の延長の上にあるものだった。しかしアメリカの技術者たちは、農民のなかから生まれていた。それもソビエトには学びやすい性格のものであった。ロシアもまた農業国から出発せねばならなかったから。

そこでアメリカでは技術者教育が重視された。実用的な技術者教育である。デザインから現実の生産技術、また商品取引に至る多くの実用的な教育機関が設けられた。この取引においても、アメリカでは早くから計算機が導入され、機械化がたえず進められていたことは注目される。それは今日のコンピュータの普及にもつながるものであるから。

ソビエトもまた教育を重視した。レーニンは科学者、技術者、プロレタリアートの三者連合を求め、そのために二百に余る国立大学を設置した。一九二一年には十五歳から専門技術教育を行うことが定められ、これは学校教育と工場とを結合するものとされた。さらに一九二六年には、十五歳から入学する多くの工業学校が設けられた。このすべてがアメリカをモデルとしつつ、社会主義工業社会の建設に集中されたのである。

この社会主義という政治信条、アメリカ的技術という機械化による文明の体系化の二つの柱をもった構造のなかには、もはや宗教の座標は存在しないことはいうまでもない。しかもソビエト以前のロシアの基本宗教はギリシア正教である。ピョートル大帝以来の皇帝権力は、教会を完全にその傘下に置いていた。教会や修道院を統括する宗務庁は、俗人の皇帝官僚により支配され、またロシア皇帝は機関の最終判定権をもっていた。教会財産も、多くは国家の管理するところであつた。

レーニンはまず国家と教会の完全な分離を求めた。宗教は公的なものではなく、純粹に私的なものである。こ

の国家と宗教の分離は、べつにソビエトのみではなく、近代国家体制の誕生にあたっては、いずれの国も直面した問題である。

宗教が私的なものとみなされると、次には個人の世界観が宗教をどうみるのかの問題となる。もちろん社会主義体制の基本は唯物論による世界観である。とすればここに宗教は否定されるべきものとなる。その立場から教会や修道院の土地はすべて国有化され、教会での結婚や離婚は法的には意味のないものとされた。ついで一九一八年、国家と教会、学校と教会の完全分離の法令が布告された。これは現代までは行われている大原則である。宗教は完全に個人レベルの問題とされ、公的なあらゆる面での宗教色が排除される。従って集団としての宗教儀礼や宗教用の出版は、政府の許可を得ねばならない。また儀礼を行う教会堂は国有財産なので、儀礼はこれを借用することで行われる。

また多くの教会や修道院が、閉鎖されたり破壊されたりした。レングラードには名高いカザン大寺院がある。これはバチカンの聖ピエトロ寺院を写した建物で、一九

三二年からは科学アカデミーの管理下に「宗教と無神論の博物館」となっている。多くのアイコン、司祭たちの衣装、またギリシア正教の歴史が展示され、反宗教の宣伝体となっている。だが同じレングラードのロシア美術館には、アイコンの展示室が何室もあって、ここではアイコンは、ロシアの誇るべき国民美術として評価されている。一九二五年には無神論者同盟が生まれ、『無神論者』、『反宗教者』などの雑誌が刊行された。ただしこの同盟

はどこまでも民間運動のスタイルをとり、政府が公的な援助をすることはみられなかった。それはキリスト教国であるアメリカ、ヨーロッパに対する配慮のためであったようである。

ところが第二次大戦におけるナチスドイツの大規模な侵攻は、ふたたびギリシア正教を復活させた。ドイツに對抗する国家勢力のためには、やはり教会の全面的協力が必要となったのである。さきの無神論者による二雑誌は廃刊となり、多くの従軍司祭も派遣され、神学校も開設されて、聖職者の養成が公的にみとめられた。ひきつづいて一九四三年には政府内にロシア正教会問題会議が

置かれた。議長は政府側である。国家と教会は完全に分離されている。しかし国家は教会を放置しておくわけにはいかなかった。大戦のなか国家の存亡の危機にのぞんだとき、国民の間のかくれた信仰がいかに大きなものであるかが、表面化してきたのである。それは農村部においてことに著しい。ここに宗教は私的レベルのものと定義しながらも、国家は宗教の存在を認めねばならなくなったのである。

そして今年の一九八八年はキエフ・ロシアのウラジミール大公が、ギリシア正教に改宗して千年になるというので、モスクワをはじめとする各地では、宣教千年祭が盛大に催されたと伝えられている。総主教とゴルバチョフ書記長との会見も実現し、主教は勲章を受けた。教会と国家との新しい関係が生まれたのである。政治と宗教はふたたび一致したのである。

こうした国家と宗教の関係は、かつての帝政時代の皇帝権力と教会の関係にほとんど同じである。あるいはビザンチン時代の政府関係の様式に似るといってもよい。つまりウラジミール大公以来、千年の間に国家と宗教の

関係は、きわめて密接なものとして存在してきた。宗教は国家に従属する形でその立場をきずいてきた。しかし革命後数十年の間は、技術と機械による地上天国への幻想が、神による天国にとって代わっていた。それにはめざましいまでのアメリカの協力があつた。しかしその幻想が終わったとき、ふたたびかつての国家と宗教による天国願望が復活したのである。

二、技術国家のユートピア

わたしの手もとに一冊の本がある。ハーワード・スコット創唱、四至本八郎著の『テクノクラシー』、昭和八年二月一日刊行、ところが十五日には早くも三四版とある。まさに当時のベストセラー。著者は在米十七年に及ぶ新聞記者という。

いったいテクノクラシーとは何か。この語も今はほとんど忘れられているだろう。それは一九一九年、経済学者のT・B・ペブレンが、『技術者と価格制度』と題する一文を発表したことにはじまる。彼はいう。アメリカの全生産を新しく組織替えし、現在つねに最大の利益の

みを求めようとする商業に代わって、最大限の生産とサービスを求める技術者がこれを管理するならば、生産性は現在の数十倍にもなろうと。さらにW・H・スミスは同じように全産業を技術者の合理的管理の下に置くことを最善として、これをテクノクラシーと呼んだ。技術者は合理の使徒である。

ついでコロンビア大学のH・スコットを主宰者とする科学者、技術者のグループは、アメリカ社会の構造の科学的究明を開始し、一八四〇年来のアメリカにおける、エネルギーの変化を歴史的に調査した。ところが一九二九年に有名な大恐慌が起こった。失業者はアメリカの全土にあふれ、飢える者も多かった。しかし一方では価格制度を維持するために、農産物や機械生産物の廃棄も行われていた。明らかに資本主義の大きな矛盾である。このときにあたってスコットは、貨幣による価格制度に代わる、エネルギーによる価値体系の創出を提唱したのである。それはアメリカを新しいエネルギー国家として再建しようというものであった。

二十世紀となって技術は発達し、人類はこれまでにな

い高い生産力をもつようになった。しかし大恐慌のような不幸な事態が生まれている。これは経済制度、特に不安定な価格制度が因となっている。そこでより安定なしかも計量しやすい、合理的な経済単位を用いれば、産業は客観的、合理的に管理できる。

この経済単位としてスコットはエネルギーをとりあげる。現在アメリカにある全機関の能力は十億馬力である。この機関が連続的に活動すれば、そのエネルギーの生産高は世界全体の成人労働の五十倍となる。アメリカがイギリスに対して独立を宣言したころは、全アメリカで、一日八時間労働で三六〇万馬力しか生産できなかった。そこで現在のアメリカの全エネルギーが、真に合理的に生産に活用されるとするならば、成人は一週に二日だけ八時間労働をすればよく、それでいて二万ドルの収入が期待される。

スコットたちはこのエネルギー国家の客観性を証明するために、さまざまな調査結果を提示した。たとえば一九〇四年には自動車一台に一二九一人・時間を要した。しかし一九一九年では一台につき三一三人・時間で、一

六〇万台が製造された。また一九二九年になると九二人・時間で五六〇万台の生産である。人・時間は減少したが、生産台数は著しく上昇した。その理由はいうまでもなく製造工程の革新、すなわち機械技術の進歩である。

四至本の『テクノクラシー』は、スコットらの所説のほかに、アッカーマン、C・H・ダグラス、M・ハッタスレーら、当時あいついで発表された論文を合わせて紹介している。その多くは蒸気機関の発明による生産革命が起こったこと、さらに電力により人間に帰するエネルギーがさらに巨大となったこと、またこのエネルギー利用による生産の増加と拡大をその論拠に置いていた。それはまさにエネルギーを基本の軸とする新しい世界、王国のプランである。

そしてこの王国の未来像も描かれた。労働時間は著しく短縮される。女性がこれまで多くの労力を費やしてきた家事労働も機械化されることによって、女性は多くの自由時間をもつことになる。またスコットは新聞はパルプとエネルギーの浪費であるとした。それに代わるラジオやテレビの方がはるかに有効である。レザーの刃も、

すでに一生の間一枚ですむようなすぐれた鋼鉄の刃が実現しているが、悪しき商業主義がこれを阻害している。羊毛より七倍も強い繊維も発見され、その収穫量は棉花の十倍にも達する。

こうした例を多くあげてテクノクラシーの唱道者たちは、アメリカ社会を価格制度の面から、根本的に変革しなければならぬことを力説した。しかしその変革のプログラムはついに提示されることはなかった。だがアメリカが、大恐慌のなかで価値観の転換にせまられていたことはたしかであり、それでこそテクノクラートたちによる社会の支配、テクノクラシーが構想されたのである。それはいわば、専門家集団によって支配される世界であった。

事実、当時のアメリカをリードする多くの英雄があった。ドス・パソスの小説『U・S・A』は、さまざまな新手法を用いて二十世紀前半のアメリカの社会の横断面を描きだす。鉄と平和の信仰にもえつつけるカーネギー、あらゆる思いつきをすぐに実験し、それをやがて商品に仕立ててしまうエジソン、GEの貴重な頭脳でありなが

ら、空想的な社会主義、テクノクラシーを信奉しつづけたスタインメッツなどが、ニュース・リールの立役者となっていた。同時にタイタニック号の沈没にあたって、人びとが聖歌のひびきとともに沈んでいったことも、ニュースのトップを飾る時代であった。

しかしこの大恐慌を終結させたのは、テクノクラシーでもなく、アメリカのヒーローたちでもなかった。いうまでもなくニューディール政策である。だがこのニューディールの基礎にあったのは、数多くの技術であった。それが三つのR、リリーフ、リカバリー、リフォームを標語としたことは有名である。多大の公共投資による大建設の時代を計画は招来した。名高いTVAの開発事業にあつては、一九三三年では農民の1%しか電気を使用していなかった。それが十年後には20%に増加したのである。電気器具の販売量も、一九三八年の十一万五千^{ドル}が一年後には九十二万二千^{ドル}と激増している。これらのニューディールによる大建設は、どれも新しい技術の開発と応用によつて完成された。ニューディールは、一面からいえばテクノクラシーの実現でもあつた。さらに第

二次世界大戦がその復興を加速した。民主主義の兵器庫として、アメリカは戦争という巨大消費に直面したのである。それはニューディールの総仕上げともなった。貨幣による価格制度の革命は起こらなかったけれども、エネルギーの増大とそれによる生産の拡大が、恐怖の貧困や飢餓に直面していた多くのアメリカ市民を、立ち直らせたことはたしかである。それはテクノクライトたちのいう、技術の支配、専門家の管理の正当さを語るもののようにみえた。

三、アジアの世界

だが第二次大戦の終結は、同時に新しい時代の到来を告げるものとなった。その一つは中国とイスラムの登場であり、いま一つは、かつてはほとんど同質の技術支配の社会を目標としていたかにみえる、アメリカとソビエトの対立である。加えてヒロシマに象徴される新エネルギーは、第三のエネルギー革命を予感させるのに十分であった。

中国は伝統的に無神論の世界である。儒教は孔子が「怪

力乱神を語らず」といったように、道德哲学であり政治哲学である。道教は庶民の間の宿命観に根ざした宗教であり、仏教は知識人の間では、むしろ個人の哲学とみなされるところが多かった。

こうした土壌の上に立つて、新中国のリーダーとなつた毛沢東は、国家体制として社会主義を選んだのである。だがその方向はさきに述べたソビエトのように、直ちに工業社会の建設をめざすものではなかった。その主義とするところは、農業社会の組織化である。それは中国の革命はつねに農民反乱の歴史であるという伝統の上にある。革命の初期から毛沢東の軍隊は、戦闘隊であるとともに工作隊であることを要求した。軍隊は新しい農村や都市を獲得するとともに、その管理工作にあたるものとされた。

都市や農村もふくめて全中国が人民共和国として組織化されたとき、そこに工業化の問題が浮かび上がつてくる。最初の工業化はソビエトから学ばれた。しかし第二次の五か年計画では、ソビエトから離れて、独自の工業化路線をとることが決定された。それは革命的な大衆運

動の昂揚^{こうやう}によつて、それを基礎とした近代工業の管理方式すなわちシステムをつくらうというものである。つまりプロレタリアートによる工業の指導管理のシステムによつて、社会主義工業の独自性を打ちたてようとしたのであつた。これはソビエトがアメリカの技術体系の導入を試みたのと、本質的に異なつた立場である。その結論がいわゆるプロレタリア文化大革命であつた。よく知られている「上海工作機械工場での技術者養成の道」の報告は、その実状を明らかにしている。労働者出身の技術者、革命的青年技術者、革命的幹部が、科学の研究と技術上の設計の主人公となつたと報告はいう。そして教育は生産労働と結びつかねばならず、社会主義的自覚をもつ教養ある労働者を養成せねばならぬ。新しく学校に送られるのは、しっかりした政治思想をもち、生産労働の経験をもつ者であると論じられた。

ここにあるのは政治的なイデオロギーを第一とする人びとによる王国の建設である。実はそれも中国の伝統であつた。古代中国において理想の王国像を具体的に描いたのは、儒教の古典のひとつ「周礼」である。六官から

なるこの官僚国家の体制のなかで、技術は冬官が掌握するところであった。すなわち中国では古代から、技術は国家体制のなかに、その座標を明確に占めていたのである。

そのうち幾度の王朝の興亡はあっても、国家体制の原理はほとんど変化していない。科学史や技術史の語るように、中国にはすぐれた科学者や技術者が史上に伝えられている。しかし彼らはすべて官僚国家の一員として活動していた。彼らの精神をつらぬくのは儒学であり、儒学を基本思想として把えた上で、科学や技術の業績はきずかれたのである。それゆえ、自然についての解釈も、儒学という陰陽五行の原理によればよく、重要なのはその応用の形態であった。また官僚はすべて科挙という、儒学による試験をパスした知的エリート群である。この点で科学者も技術者も、行政官僚と同じ知的基礎の上に立っていた。毛沢東が政治思想の革命性を第一義とし、科学・技術はその革命性の上に立たねばならぬとするのは、かつての儒学の上にきずかれた科学や技術のあり方を思わせる。

プロ文革の否定ののちの中国では、かつては迷信として否定された、道教寺院（道観）を中心とする庶民信仰は大きく復活している。それはソビエトのギリシア正教千年祭によって、教会に集まる人びとが増加した情況と似たところがある。ソビエトがビザンチンの政教一致へ回帰しつつあるとするならば、中国もまた半世紀ほど前の、道教信仰の時代の復活ともいえるだろう。それは伝統的な精神社会への回帰である。

中国にあらんで新しい世界の大きな軸となったイスラム世界、このアジア・アフリカをつらぬく巨大な宗教共同体は、現代の世界を動かす大きなエネルギーをひそませている。第一次大戦後に近代化にふみきつたトルコは、イスラムの伝統的な生活様式―帽子、ベールなどを廃止し、同時に信仰の自由を憲法にうたった。それは明らかにヨーロッパ諸国の憲法をモデルとした近代化の選択であった。近代化イコール西洋化だったのである。

しかし第二次大戦後に生まれたイスラム世界の諸国は、多くはイスラムを国教として憲法に規定した。イスラムによる宗教共同体の基礎の上に、近代国家の体制を

けれども毛沢東の企図したプロ文革は失敗に終わった。その理由の第一はかつての体制内に位置づけられていた科学や技術は、いずれも中国を天下の中心とみる、閉じられた世界においてのものであった。それは閉じた孤立系としての国家体制にのみ有効である。しかし現代の国家は開放系の存在である。ソビエトにおいても社会主義体制の国家相互の間では、開放系のシステムをつくり、資本主義体制との間にも、限定を加えつつも開放系を維持しようとする。しかも新中国の成立の時代、中国の科学技術と先進国との間には、かなりの格差が存在していた。そのとき閉じられた国家体制のなかでの進歩と発展は、開放系のなかでの競争原理による動きに対して、どうしても遅れたものとなってくる。毛沢東の方法も過去の中国との相対的立場からみれば、進歩のテンポはとにかく早められた。しかし近代的生産技術と土法（伝統的）生産技術の二本足で歩こうという方針は、近代技術のもつ効率重視の立場からみれば、著しい資源の浪費、労力の浪費となってくる。それは開放系の国家相互の間の競争には耐え得ないことになる。

構築しようとしたのである。パキスタンはまさにその一例であった。東パキスタンは米作、言語はベンガリーである。これに対し西パキスタンは小麦作、言語はウルドゥである。この条件をみても両者の社会構造の差は、すぐに推定できるだろう。それにもかかわらず、独立当初の人びとは地理的にインドをへだてたふたつの社会が、イスラムによって結合しようと信じた。しかしこの信念はくずれ去った。いうまでもないバングラデシュの独立である。近代の社会は伝統的なイスラム共同体を分解するほどの、構造的な力をもっていたのである。

だがこれに対するべつの動きがまた現れた。それはイランのホメイニ体制の成立である。パーレヴィ王朝によるイランの近代化は、トルコと同じくヨーロッパ、アメリカをモデルとしたものである。外資の導入による工業化の方針、あるいは風俗の改革など、それはソビエトに国境を接するために起った、米ソの冷戦構造の反映ともなっていた。アフガニスタンもその渦中にあつたことはもちろんである。

このパーレヴィ王朝をくつがえしたホメイニの革命

は、イスラムの伝統への回帰であった。ヨーロッパ流の近代合理主義に代わる、伝統的なイスラム法、共同体のための法を優越させ、それを組織原理とすること、これは近代の合理主義にもとづいた国家体制に対する、明らかなアンチテーゼである。しかも革命は成功し、ホメイニ体制は一応の安定をみせる。それは神の支配を否定して生まれてきた世界構造原理としての近代主義に対し、神の支配下にある共同体の構造原理が国家体制を成立させる力を、今日においても十分にもつことを示したきわめて重要な事実である。全く過去のものとしか考えられていなかった宗教国家の成立は、現代の実験国家としてさらに注目されねばなるまい。八年にわたるイラン・イラク戦争も、共和制という近代主義に立つイラクが、宗教国家の誕生にその基盤のゆらぎを感じたところにはじまるともみられよう。

しかもイスラムは科学や技術を決して否定しない。かつてのイスラム科学はきわめて高い水準にあり、それがヨーロッパに輸入されて、ルネッサンス以後の近代科学の祖となったことは周知のことである。十四世紀のアラ

ビアの哲学者イブン・ハルドゥーンは、学問を英知の所作とし、数学をはじめ諸種の科学の重要さを強調した〔歴史序説〕。彼は学問と教育は文明に本質的に相伴うものであるとする。さらに技術についても農村的技术と都市的技術に分け、都市文明の発達は技術の極度の発達によるものとみた。彼にとつて科学や技術は、他の生物のもたぬ人間独特の思考力の所産なのである。文明はこのふたつによつてはじめて発展する。イブン・ハルドゥーンの提示した学問論は、イスラム世界のなかでの科学や技術の位置を明らかにしている。ここでは科学や技術は宗教国家の体制と、少しも相反し対立することはない。それはむしろ文明の活力となるものである。

イブン・ハルドゥーンはその学問論のなかで、時折「神は慈愛をもつて真理に導き給う」とか、「神は正しいことに導き給う」などとその信仰を書きいれている。それはまたくりかえされる「神は全智なり」との信仰によるものであった。全智全能の神、アッラーの導きによつて、人間の英知は啓発され文明は創造される。とすれば英知による学問は、むしろ神の好みたまうところとならう。

このイスラム世界の科学と技術に対する信条の上にきずかれていた現代文明の姿は、実は今日の人びとの最も注目すべきところではないか。それは伝統的に知を優越させ、神を不語のものとする中国とともに、独自の未来像が予測される場である。

四、終わりに

この夏、わたしは十余年ぶりにインドネシアの一小島バリ島を訪れた。知られるようにこの地は、イスラム国家のインドネシアのなかで唯一、ヒンズー教徒を大部分とする島である。多くの新しいホテルが建ち、外国人の観光客で町はあふれていたけれども、島のヒンズー教の感覚は少しも変わっていないように、わたしには思えた。ヒンズー教は汎神教的な性格をもっている。家の人びとが毎朝、家を中心とする祖霊をはじめ、多くの神々に供物をささげ、讃歌（マントラ）を唱えることも同じように行われている。バナナの葉を編んで小さな籠（かご）をつくり、そのなかに供物をいれたものもバザールでは多く売られている。聖地とされるタンバクシリンの大寺院では、神

の前に祈る人びとが小雨のなかに坐りこんで祭司の水を受けていた。

そしてある村の大寺院では、賑やかに祭が行われていた。ヒンズー教の寺院は、相互に無関係で独立したものであり、それを支えるのは一種のカースト、またはその寺院の主神と特別の関係をもってきた集団である。この寺院は聞くところでは、第二級カーストによつて維持されているものようであった。

高い祭壇がきざかれている。その上は供物の山である。また祭壇の下には、さまざまな供物が山積みされ、しかもその供物はどれも巧みに細工され組み合わされて、色彩あざやかなオブジェにもなっている。そして一方には古い供物を集めてならべた祭壇がある。これはやがて焼かれるという。きれいに花で髪を飾り、晴れ着をつけた少女たちが祭壇を仕上げ、下の方では供物をつくる人びとがまだいろんな細工をこころみている。夕方になると寺院全体に赤や青の色電球がともされた。だがこの寺院の外の大道には、新型の自動車やオートバイが走りつづけ、その風景は日本などと変わるところはない。それは

ある面では日本と同じ風景かもしれない。日本も各地の神社の祭は盛んに行われ、その横ではエレクトロニクスが活動しているのだから。だが神の支配が日常生活に深く食いこみ、信仰は家の生活のなかに第一義的に表現され、寺院祭祀は二義的であるというヒンズー教の性格からみれば、やはりそれは日本とは異質の神と現代の共存の姿である。

そして日本ではたえず経済大国、技術立国論が語られる。その内容については今更述べるには及ぶまい。さらには二十一世紀の日本が世界的リーダーとなることを、楽天的に語る人も少なくはない。そして近年とみに発達したさまざまな情報機器による、情報の王国の建設が論じられている。それは時にはかつてのエネルギー王国の建設を夢見た、スコットたちを思いださせるところがある。それは情報操作による天国への幻想である。

また一方ではヨーロッパは一九九二年をめざして大きな変貌をとげようとしている。三億二千万の人口をもつEC共同体である。エスプリ計画、ユーレカ計画などの共同開発計画は、すべて技術共同体の成立をめざしてい

る。経済共同体から技術と開発の共同体へ。これもまた技術による共同体建設の歩みにほかならない。そのなかでかつてヨーロッパを統一していたカトリックによる精神帝国が、プロテスタントとの一致を求める動きを復活させつつあることも注目に値する。異文化としての他宗教との和合への動き、それはこれまでみられなかった新しい運動である。

二十一世紀はまちがいなくやってくるだろうか。西暦一〇〇〇年、ヨーロッパは不安のなかに生きていた。黙示録の教えのなかで。そうした不安の時代を歴史のなかにもたぬわたしどもは、はたして、新技術による天国の到来のみを、楽天的に待望していいのだろうか。わたしどもの生きるアジアの世界は、イスラムにしろヒンズーにしろまた中国の道教にしろ、人間がさまざまな神とともに生きている世界なのだが……。

(よしだみつくに・京都大学名誉教授)